

國學院大學學術情報リポジトリ

手塚雄太著『近現代日本における政党支持基盤の形成と変容:「憲政常道」から「五十五年体制」へ』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村井, 良太, Murai, Ryota メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000452

書評と紹介

手塚雄太著

『近現代日本における政党支持基盤の形成と変容——憲政常道から「五十五年体制」へ』

村井 良太

一 内容の紹介

本書は、著者が二〇一五年九月に國學院大學に提出した博士論文『近現代日本の政党と社会——利益団体・後援会との関わりを中心に』をもとに、新たに書き下ろしの章を加えて二〇一七年三月に刊行された。

本書は二部から成る。世界恐慌から日中戦争前夜までの時期を対象に二大政党（立憲政友会・立憲民政党）の模索と帰結を支持調達という社会との接点からたどる第一部と、一九二四年に初当選し六三年に政界を引退した加藤隼五郎という

一人の代議士の支持基盤を通時的に跡付ける第二部である。あえて古い言葉を使えば、日本における政党政治の「暗い谷間」（非常時／準戦時・戦時・占領期）を貫く貫戦史である。

戦時期の議会や政党が形骸化していたわけではない（「したがって「暗い谷間」ではない」という議論は、著者も整理するとおり、ゴードン・M・バーガーの『大政翼賛会』（坂野潤治訳、山川出版社、二〇〇〇年、原著一九七七年）以来、指摘されてきたことであり、古川隆久をはじめその後の研究でも補強されてきている。ただ、初期の通説が強すぎたためか、個々の論点への反駁という側面が強く、政策過程や支持基盤なども含めた構造的な理解については、現在まさに検討が進んでいる最前線の一つであり、本書はその優れた成果である。

また、本書のもう一つのモチーフにはこの「暗い谷間」をまたいだ関係性、戦前・戦後の連続と断絶への関心があり、戦前日本の政党内閣期における政党の模索は、戦後日本における五十五年体制の出発点として捉え直すことができる結論づけられている。

それはいかなる意味において、また、いかなる実態を踏まえてであろうか。本書の分析と意義を論じる上で、まずはその内容を紹介する。

序章 支持基盤からみた政党の戦前と戦後

著者は冒頭、本書の企図を、「昭和恐慌期から高度成長初期にかけての政治・経済・社会の大変動期において、政党及び政党政治家がいかに支持基盤を形成しようとしたのかを考察する」と述べる。支持基盤を検討するのは、戦前と戦後で「憲法の差異という大きな違い」があっても、政党と政党政治家にとって「自らの支持基盤を広げ、多くの有権者から支持を得ることが不可欠であるという点において違いはない」からである。

そのために本書は二つの検討を行う。「昭和恐慌前後における政党の経済政策、及び政党と利益団体等との関係を検討する」とことと、「代議士が有権者との関係を構築し、支持基盤を更新し続ける過程を大正中期から高度成長初期にかけて検討する」とことである。それぞれ第Ⅰ部、第Ⅱ部に対応している。この作業を通して、副題に示されるように、「憲政常道」が続いた政党内閣期から、戦後の「五十五年体制」に至るまでの政治史を架橋・横断する。

このことは、著者が、先行する政党史研究を①戦前期政党内閣の成立と崩壊、②戦時期議会勢力の動向、③戦後五十五年体制の形成を扱う三種に整理した上で、相互の接統性に問題を見出していることに通じている。また、それをつなぐ鍵として二大政党（保守政党）や政党政治家の自己変革に注目

し、中央政界と地域社会の複眼的視座を設定する。

第Ⅰ部 戦前期二大政党の模索と帰結―政党内閣期以

降における支持拡大の試み

第Ⅰ部で対象となる時期の内閣は、浜口雄幸内閣から林銑十郎内閣まで（一九二九―三七年）の約八年間である。世界恐慌への二大政党の政策的対応が政友会を中心に描かれ、利益団体に焦点が当てられる。現代政治理解においても有意義な利益団体の歴史性が問われるとともに、それはひとたび常態化したと見られた政党内閣が崩壊する過程で、政軍関係ではなく、足下で政党が何をしていたのかを論じるものである。

第一章 恐慌期における二大政党の経済政策論争

―政友会の「産業五ヶ年計画」を中心に

まず昭和恐慌という国民生活の危機に直面した政友会の政策対応を、政調会長であった山本条太郎を中心に立案された大養穀内閣の経済政策、産業五ヶ年計画から考察する。山本は国民からの支持を得るため国民生活の安定を高唱し政策立案に当たった。本章では五・一五事件の政策面への影響が重視され、産業五ヶ年計画による恐慌克服論から、農村救済による恐慌克服論に軸足を移したと指摘される。首相を出せな

かった政友会は「農村救済を要求する世論を背景に政権復帰を目指す」ことになる（五〇頁）。

第二章 農村利益の噴出と政友会

―第六六議会の「爆弾動議」と「憲政常道」―

そこで次に、五・一五事件後の農村救済への政友会の取組が検討される。評者はここで扱われる斎藤実内閣・岡田啓介内閣期の分析が日本政治外交史理解の上であらためて重要であると感じている。本章は一九三四年二月の爆弾動議に注目する。この動議は従来、岡田内閣下で政党内閣復活に向けて展開していた政民連携運動を頓挫させ、迷走する「既成政党」のイメージで語られてきた。しかし著者は、帝国農会や全国町村会など利益団体の圧力を重視し、爆弾動議の合理性を指摘する。その中から「憲政常道」論が単なる二大政党間での政権交代論に止まらず、民意を代表する存在という、政党や政党政治家の意識に支えられていたことが指摘される。とはいえ農村利益という特定の民意に立脚した政権復帰構想にも問題はある。それが次に論じられる民意の多様化の問題である。

第三章 政党内閣崩壊後の利益団体と二大政党

―多様化する「民意」への対応―

利益団体相互の対立による民意の多様化が、首相を出せない政党とどのように交差していくのか。米穀自治管理法案、地方交付金制度の導入、国民健康保険法案など利益団体の「大衆運動」とも言うべき要求行動に政党や政党政治家ができるように応えていくのかが論じられる。特定利益に偏しないという政党政治家の自己認識が問われることで、議員集団は超党派で連携し、対立の調整に政党内閣を組織できない議会や政党の正統性を見出していく。

最後に一九四〇年の「政党解消」までの流れを概観して、『民意』の結節点としての政党を再構築しようとする模索」と位置づけている。

第Ⅱ部 代議士の支持基盤からみた戦前と戦後の連続

と断絶―加藤隼五郎にみる関係性の変容

こうして支持基盤に促された政党の政策的变化を論じた第Ⅰ部に対して、第Ⅱ部では個人にフォーカスが当てられる。代議士加藤隼五郎（一八八三―一九七〇年）の支持基盤が戦前から戦後にかけてどのように維持・更新されたかを、利益団体や後援会との関わりから明らかにするのである。加藤は医師出身で、名古屋市議、愛知県議を経て、一九二四年の総

選挙で政友本党から初当選した。そしてその後、民政党には行かず政友会に合流した一人で、戦後、公職追放を経て自由党から政界に復帰し、晩年には衆議院議長を務めた。

第四章 戦前期名古屋における個人後援会

― 支持基盤の形成と展開

加藤が国政選挙に初挑戦して落選した一九二〇年、個人後援会の五月会が自発的に組織された。新聞記者から業界団体へと、市議選時と支持者が異なるというのは興味深い指摘であった。五月会の活動が紹介されているが、タブロイド判二―四頁の『時事公論』という機関誌を発行し、名古屋での反憲政会・政友会系に位置づけられる。本章でも産業五カ年計画が鍵となっており、第一章でみた政党の政策変化が個々の代議士の支持基盤にもあらわれている。党を変えていくときの個人後援会の動きや経済・生活問題を重視する中で女性支持者を積極的に求めていく姿勢が特に印象的であった。女性支持者は正和婦人会という婦人団体に組織化されていく。

第五章 戦時体制下の代議士と利益団体

― 支持基盤の維持と更新

本章では第四章で検討した加藤の支持基盤の変化を地域の有力産業である陶磁器業界との関係でさらに明らかにする。

中心資料は加藤の日記である。加藤には一九三六年から六九年までの日記が残されている。日中戦争・太平洋戦争下での代議士の行動とその支持基盤との間には連動性があり、業界と官庁とを結ぶ活動を通して加藤は存在感を発揮し続けた。加藤は翼賛政治会に属し、与党議員として行動する中で、より身近な、かつ部分的な民意と政府とを結ぶ結節点として機能したのであった。

第六章 公職追放された代議士の占領期と戦後

― 支持基盤の再生

敗戦と占領によって、翼賛選挙で推薦を受けていた加藤は公職追放される。そのニュースを聞いた加藤が「今一步ニシテ大臣タラン矢先キ」と慨嘆する様子（一六七頁）は貫戦史としての本書を凝縮しているように思われた。その逆境の中で加藤が支持基盤を維持・更新し、政界に復帰するなかで前派代議士の強固な地盤の内実が動的に変化していたことが示される。市長ではなく衆議院議員としての再選を目指した点も興味深かった。公職追放が解かれると五月会と正和婦人会を再建し、会員の拡大に乗り出す。

第七章 戦前派代議士からみた戦後復興と高度成長

―支持基盤の再構築と終焉―

公職追放を経て六九歳で政界復帰を果たした加藤と支持基盤のその後を論じる本章は、出版に際して新たに書き下ろされた章である。国民生活の向上に務め、愛知県自民党の重鎮となり衆議院議長ともなる。評者には党人佐藤栄作のまめめらしい様子が面白かったが、加藤の無任所相として入閣、さらに造船疑獄後の法相というのはなんともきな臭い。後に衆議院議長となったのも国会混乱での辞任者の後任であり、自らもデモ隊の国会内乱入による辞職であったという。著者はこのような活劇には禁欲的だが、どのような支持基盤を持つものがいかなる時代状況と政治構造の下でこのような役割を担うのかということにはさらに教えを請いたいように感じた。

終章 「憲政常道」から「五十五年体制」へ

―戦前期二大政党の模索と連続―

終章ではこれまでの議論をまとめ、政友会の政策が持つ射程の長さを指摘している。戦前期の政党の変化と代議士の変化が合わせ鏡のように検討され、後述の新たな知見の整理はもとより戦前期二大政党の模索が五十五年体制の出発点となつてることが示唆される。また、今後の課題として、官僚

との関わり、都市政治における代議士の役割、そして戦前日本の個人後援会の全貌を明らかにすることで、長期的な日本の政治社会全体の変容を捉えることへの意欲を記している。

二 本書の達成―新たな知見と方法

以上の紹介で本書の魅力的知見が網羅できているわけではないが、続いて本書の達成について見てみたい。それは、明らかにされたことと、その方法の両面にある。

第一に、明らかにされたことでは、まず、世界恐慌に当時の二大政党、なかでも政友会が国民の意思を政治に反映すべく適応に努めていたことが確認された。次に、利益団体と個人後援会との関わりのなかで一人の代議士の支持基盤がどのように形成され、展開していったのかが実証的に示された。なかでも興味深いのは、戦前派代議士が戦後にも活躍したが、それは地盤が強固であったという単純な話ではなく、まさに地盤を涵養しながら成長を遂げていったという指摘である。それは民意の糾合でもあった。

さらに、政党及び政党政治家の自己認識が分析されていたことは重要である。これは非西洋社会で立憲国家を形成するという問題を長期的に考える場合に、考察されるべき大切な論点であろう。

大きく言えば、本書は、中央と地方において、変化に適応する政党と政党政治家を明らかにした。それは国民と政治を結ぶことに意識的で活動量の多い政党政治家の集合体としての政党が活躍する世界であり、政党の地位が低下しても代議士の活動量は落ちたように見えない。このことは戦後の政党政治の活力が必ずしも新憲法による正統化のみに起因しないことを予想させて面白い。それは政党政治家だけの問題ではなく、政治家を支え活用する社会の存在が前提となっている。

第二に、本書の価値は結論に止まらずその方法にある。それは政治学と歴史学の意識的対話の姿勢である。本書のもととなる博士論文で著者が手にした学位は、博士（歴史学）であるが、辻中豊『利益集団』（東京大学出版会、一九八八年）や蒲島郁夫・山田真裕「援会と日本の政治」（『年報政治学』四五、一九九四年）など、政治学における利益団体・利益集団研究や支持基盤をめぐる議論が強く意識され、歴史研究に枠組みを与えている。評者は政治史を専門としているが、常々考えるのは政治史とは何だろうということである。政治のことを歴史的に扱えば、また、歴史の政治部分を扱えば政治史なのだろうか。政治学の分析手法や考え方が歴史学に応用され、また歴史学の精緻な史料操作が政治学の仮説を拡張していく効果もあるのではないだろうか。

そして政治学など異分野との対話への積極性は歴史学の価値を高めるが、異分野交流のみを評価するのでは片手落ちであろう。本書は博士論文をもとにしているためであらう、日本政治史における長期的な先行研究の問題意識が反映され、地道な実証と結びつけられている。また、特に第Ⅱ部を呼んで思い起こしたのは、筆者の主査を務めたという上山和雄の『陣笠代議士の研究―日記にみる日本型政治家の源流』（日本経済評論社、一九八九年）であった。研究の時代を越えた観点の継承は素晴らしいことと思う。本書もまた後進の学問的礎石となるだろう。

三 いくつかの論点

その上で、いくつかの論点についてももう少し議論しておきたい。

第一に、第Ⅰ部と第Ⅱ部の関係についてである。中央でのマクロの視点と個人史を通じた地方でのミクロの議論が合わせ鏡のように配置されていて素晴らしい。その上で、一―三章と四―五章が裏表の関係にある一方で、六―七章が後ろの時代に飛び出している形となっている。もとよりすべてを明らかにすることができない以上、何がないという指摘はあまり意味がないが、第Ⅰ部の中で第一章の係り結びとなるであ

ろう戦後の中央政党政の再建についても敗戦と憲法構造の変化によってどう政党政の行動が変化したのか、政党政の主導性の回復が日本政治に何をもたらしたかの著者のさらなる分析を期待したい。

第二に、制度や構造、さらには体制の推移の影響をどう考えるかという問題である。「本書は政党政内閣の成立と崩壊といった視角からあえて離れて」と述べられている（二五一頁）。しかし、体制の問題を意識せずに政党政や政治家の行動を理解することは難しいように評者には思われる。著者は五・一五事件の意味を論じる中で「政党政内閣制の崩壊」を「形式的転換」とも述べるが、それに止まらず「政党政主導による長期的視野に立った政党政の変容をもたらし、その後の政党政の政党政のあり方を規定した」と述べている（四九頁）。これは政党政内閣制の効果ではないだろうか。アクターがどのような資源をもってどのようなゲームを行っていたのか。憲法的存在として議会有あり、選挙で勝利するために票を得なければならぬとすれば、確かに憲法がある限り再選を目指すというゲームは変わらないだろう。しかし、支持基盤を考えた時に、政党政が政党政を採る蓋然性の多寡、権力との距離は大きな意味を持つのではないだろうか。それとも革新官僚で商工大臣でもあった岸信介が戦時中に代議士を目指したように、代議士それ自体に価値がある社会だったと見るべきだろうか。

戦時期の議会有政党政が形骸化したわけではない（、したがって「暗い谷間」ではない）という冒頭で述べた議論に対して、「憲政常道」期や高度経済成長期の政党政政治を少し詳しく学んできた評者の目から感想を記せば、それは戦後歴史学が述べてきたような意味での形骸化や無力化ではないが、川下（下流）の意思決定には口出しができるが、川上（上流）の意思決定への規定力を失っているという点で、「憲政常道」期と比べて明らかに形骸化・無力化しており、それは「五十五年体制」期とも全く異なるように思える。これは利益団体という本書の視点にも関わる論点で、本書が引く辻中豊は、利益団体の政党政過程への働きかけが、政治制度、他の政治アクターとの歴史的関係、政治文化に規定されると述べる（辻中『利益集団』一一九頁）。利益団体が政党政を相手にするのか、個々の議員を相手にするのか、本書二九一頁の第五章（五）の議論は時期も含めて大変面白かった。本書の対象となる時期についてこの点で最も史料を読み、詳しいのは著者であろう。この点でもさらに教えを請いたい。

第三に、本書の重要な貢献として世界恐慌への対応の解明がある。これは酒井哲哉によって示唆されたパズルである。五・一五事件を機に政党政の戦略も政党政支持基盤も変化するというというのは興味深い指摘であった。その上で、何が変化をもたらしたのだろうか。ロシア革命であろうか、男子普通

選挙制であろうか、政党内閣制であろうか、それとも世界恐慌による深刻な事態というショックであろうか。国民生活への注目は日本近代史の長期的文脈の中で変化で足りないのかもしれない。御厨貴は「日本政治における地方利益論の再検討」(『レヴァイアサン』二号、一九八八年)で、星亨から原敬、田中角栄に続く地方利益論の系譜を論じた。また、加藤高明首相は一九二六年一月の施政方針演説で中央地方の参政権拡張で政治生活の基礎が安定し、次に経済的社会的生活の充実を図ると述べた(村井良太『政党内閣制の成立一九一八―二七年』有斐閣、二〇〇五年、二四六頁)。タイムラゲをどう分析するかによっても評価は変わってくるのかもしれない。また、四九頁で著者自身「無産政党」に言及し、社会大衆党についても触れられているように、戦前・戦後を通して、支持基盤という点でも、社会民主主義政党との関わりは重要であるように思われる。

最後に、戦前戦後連続論と断絶論について、本書の副題は大変魅力的である。戦前と戦後が断絶しているのか否か、いつ断絶したのかといった論点は敗戦後長らく問われてきた基本的問いである。敗戦直後においては断絶すべきという一種の運動論でもあったが、七〇年を経て戦後すら遠くなる中、本書のようにどのようという点に注目する冷静な検証が可能となっている。著者が研究整理した①②③の像の融合とい

う課題は指摘の通りで、今後のさらなる研究の展開が期待される。

以上はいずれも本書に触発された論点である。本書はすでに述べたように政治学との対話という新しさを持ちながら、それ以上に、とにかく面白い。評者は第Ⅱ部と連動した形での第Ⅰ部の議論を高く評価するが、それでも加藤の生涯への関心を押さえられない。評者が最も惹かれたのは一九五八年に受けた衆議院在職二五年による永年在職議員表彰である(二二七頁)。これは議会政治が後退していく中で設けられた制度を出発点とし、選挙民を代表し続けるという地道な取組を時間によって示している。

また先に触れた上山和雄『陣笠代議士の研究』は、ジェラルド・カーチス『代議士の誕生』(山岡清二訳、サイマル出版会、一九七一年)も引きながら、「政治生命を維持するための政治活動」を歴史的に考察する重要性を指摘し、政治家がどのように政治家たり得たか、日常的な地盤培養運動等を明らかにした(i, iv頁)。そして、その「おわりに」の冒頭で「山宮藤吉という、明治・大正・昭和の三代を生きた一人の陣笠代議士が、中央政界・地方政界の変転の中で、どのような軌跡をたどってきたかを記してきた」と述べる(三二五頁)。本書は世界恐慌の中でひとたび成立した政党内閣制が崩壊し、戦時議会に変質し、占領下でさらなる展開を見てその後

の再建に結びついていく日本政治史上の一大激変期を眺望する。しかしそれも山宮が経験したものと異ならない変転の一つに過ぎないのかも知れないと感じた。

本書に示されているのは学問の継受と交流、そしてその中から新たに構築された仮説と実証の有効性であろう。そのことをあらためて高く評価しておきたい。

(A5判、三三〇頁、ミネルヴァ書房、二〇一七年、七〇〇〇円＋税)